



大学で被災したら？

西宮で催し 学生ら30人討論

西宮市内の9大学の学生をつくる大学連携学生プロジェクト(NCC)が15日、講演とワークショップのイベントで大学生が考える防災を西宮市大学交流センター(同市北口町)で開いた。写真。

昨年の熊本地震や今月の九州北部の豪雨など、多発する大災害に備えるのが狙い。阪神・淡路大震災と東日本大震災でボランティアの受け入れや派遣に尽力した「ひよっこボランティアプラザ」の高橋守雄所長(69)と東北大学の村松教授(58)を講師に招いた。

九州北部の豪雨で12日に被災地入りした高橋所長は、写真を見せながら被害状況を説明。山間部の被災地が福岡、大分の県境にまたがるため、今後ボランティアの活動をスムーズに行うには「複数の行政の間での緊密な連絡や協力が何より重要になる」と指摘した。

村松教授は「学校は避難所になることが多い。東北大では職員や学生が避難してきた人の世話をした」と東日本の経験を話した。

その後、約30人の参加者は4班に分かれて「大学で被災したらどうするか」を討論。「地震の知識が少ない留学生を助ける」「ネットが使えなくなっても困らない連絡手段を確保する」などの案が出た。

武庫川女子大3年生の神岡未佳さん(20)は「災害は人ごとではない。いつ起きてもおかしくないと思う今回のイベントを企画した」と話した。

(三津山朋彦)